

ゲーテとアメリカ原住民

伊藤, 利男

<https://doi.org/10.15017/2332610>

出版情報 : 文学研究. 85, pp.67-86, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



ゲートとアメリカ原住民

伊 藤 利 男

(一)

『詩と真実——わが人生より』第三部第十五章の始めてゲートは、一七七四年十二月五十一歳で亡くなったズザンネ・カタリーナ・フォン・クレッテンベルクのことを回想する。二十五歳のゲートは、今は病気がちになったクレッテンベルク嬢を時おり見舞つて、雑談したり、絵をかいてみせたり、また何かを朗読して聞かせたりしているが、そういう朗読のなかには伝道報告書が含まれていた。それに関連してゲートは次のように書いている。「私は彼女に伝道報告を朗読してやり、彼女はそれをいつもたいへん気持よく聞いていたが、私は伝道者たちに反発して住民たちの味方をし、そして住民たちの昔の状態の方が新しい状態よりもよかった、と語ることがもうすでに習慣になっていた。」¹

一読、なんの抵抗もなく先へ進めそんな文章であるが、具体的な内容を思い浮かべようとすると、簡単に通りぬけることのできない言葉がいくつか目につく。まず伝道報告というのはどのような伝道者から送られてきたものか、住民たちとはどこの住民なのか、また彼らの昔の状態、新しい状態とは具体的にはどういうことなのか、というような疑問が浮かんでくるのである。しかし筆者が見たかぎりのゲート全集の『詩と真実』の巻は、これらの疑問点

について注解を施していない。

そこで問題の箇所のコネクストから考えてみると、伝道者たちというのは、クレッテンベルク嬢が所属するところのヘルンフト派敬虔主義すなわち同胞教団の伝道者たちと見るのが、最も適切であろう。これらの伝道者たちから教団本部に送られてきた伝道報告書が、あるいは恐らくその写しが、信者であるクレッテンベルク嬢のもとへも回されてきて、それをゲーテが読んでやったものと思われるのである。同胞教団は、あとで述べるように、世界の各地に伝道団を派遣してきたが、一七七〇年代には主に北アメリカで伝道活動に従事していた。従って、ゲーテという住民とは、主として北アメリカの住民ということになる。しかしこの住民はヨーロッパからの移住者ではなくて、もともとそこにすんでいた原住民であることは言うまでもない。彼らは当時も現在もなお「インディアン」と呼ばれているが、ゲーテは『詩と真実』でもその他の箇所でも、白人が誤認にもとづいて彼らに与えたこの呼び名を使用していない。（ゲーテとの対話録のなかには「インディアン」という語をゲーテが使ったように記しているものがあるが、ゲーテが本当にそれを使ったのか、あるいは彼が他の語を用いたにもかかわらず、記録者が便宜的に「インディアン」と記したのか、区別したい。）

さて、そこで、その原住民たちの昔の状態、新しい状態というのは、彼らの大陸へ白人植民者たちがやってくる前の状態と、やってきた後の状態、あるいはより狭い意味で、彼らが伝道者たちによってキリスト教に改宗させられる前の状態と、改宗させられた後の状態というように解することができる。

以上のような解釈にもとづいて『詩と真実』の問題の箇所を敷衍するならば、次のようになろう。「私が同胞教団の伝道者たちに反発して北アメリカの原住民たちの味方をし、そして彼らの昔の状態の方が、ヨーロッパ人たちがやってきて彼らをキリスト教に改宗させている今の状態よりもよかった、と語ることがもうすでに習慣になっていた。」

ゲーテのヘルンフト派伝道者に対する反感とアメリカ原住民への親近感⁽¹⁾は明白である。これがいったどこから由來するのか。たしかにゲーテは『詩と真実』のおなじページで、「自分を外国人、他所者、いやそればかりか異教徒とさえ見たてていた……」と述べているが、この発言は右の疑問に答えるものではない。問題は二つの側面から考察されなくてはならない。一つはゲーテと同胞教団との関係、もう一つは、彼が伝道報告書からどのようなアメリカ原住民像を導きだしたか、ということである。前者については、『詩と真実』のおなじ章の問題の箇所につづく記述から事実関係のあらましを読みとることができよう。後者については、問題の伝道報告書を読むことができないかぎり、正確な解答を見出すことは不可能であるが、しかしゲーテのアメリカ原住民像そのものを探る道はまだ他にもありそうである。以下の考察は、そういう道を通じてそれに接近しようとする試みである。

(二)

十八世紀ドイツの知識人たちは一般にアメリカ原住民をどのように見ていただろうか。その顕著な一例として、アルブレヒト・フォン・ハラーの場合を、カール・S・グートケの論文『齒が抜けおちた高貴な野蛮人たち——アルブレヒト・フォン・ハラーのインディアン像』⁽²⁾を参照しながら見てみよう。アメリカの現地へ行ったことのないハラーは、書物、とりわけ旅行記から得た知識にもとづいて、自分の「インディアン」像をつくっているが、それは当然ながら時期的に変化を見せている。最初期の教訓詩『人間道德の虚偽』⁽³⁾（一七三〇）に見られるアメリカ原住民像は、「高貴な野蛮人」⁽⁴⁾である。すでに代表作『アルプス』⁽⁵⁾（一七二九）においてハラーは、アルプス深山の住民たちの質素で自由な、そして人間としての幸福が真に実現した生活を、都会の文明生活の優雅な頹廢と誘惑的な爛熟の反対像としてうたったが、「インディアン」の生活もそういう文明に毒されていない理想的な状態として捉え

られる。『人間道徳の虚偽』においてハラーは、フランシス・サヴィエルによってキリスト教が伝えられた「ニッポン」⁽⁶⁾で、おかみの弾圧にあつても信仰をすてず、あらゆる迫害と責苦に耐え、最期は従容として祈りながら殉教の死をとげた男のことを語ったあと、続けて、そのニッポン人と「同じ英雄的精神をもつて」⁽⁷⁾火あぶりの刑に死んだ一人のヒューロン族（『アメリカ原住民の一部族』）の男のことを述べる。彼は敵対する部族の捕虜になって、自分に与えられた女の「致命的なことば」⁽⁶⁾によって死刑を宣告されたのである。この二つの死は、どちらがより尊厳であるか。ハラーはこう歌う。

「だがしかし殉教者の傷は寺院と祭壇によつてあがなわれ、
カナダの裸の英雄は犬たちの死を死ぬ！」

このとき、死にゆくものが、自分にはなにも分らない
聖なる言葉を口にすることが肝要なのだ。⁽⁷⁾

この最後の二行の痛烈な皮肉は、もちろん教会の聖職重視主義に向けられたものであるが、しかしまた、ハラーがヒューロンの男の無実で無償の死をより高く評価していることも明らかである。この二行につづいて、ウチプー（『ハラー自身の脚註によれば、「北アメリカ原住民のなかで最も勇敢な民族」^(7a)』）の男の死がうたわれる。彼もまた何の罪もないのに、野蛮な敵の手におちて、あらゆる責苦にも不屈の精神をもつて耐えたのち、締め殺されたのであるが、ハラーは次のことばでこの節を結ぶのである。

「そして私はこの忍耐をその罪なき故にひたすらうやまつ」⁽⁸⁾

このような「高貴な野蛮人」の偶像も、しかし三、四年を経ずして倒れる。一七三二年から三三年にかけて書かれ、三四年に印刷された教訓詩『悪の根源について』の第二部の終りでハラーは次のように歌う。

「だがしかし、天賦の違いが重きをなすのは、ただ飾り物でのことだけなのだ。

だれにも必要なものは、まただれもが持たないではない。

どんな人間でも、自分が間違ったことをしたとき、生まれながらの光が、

自分に最初の判決を下さないほど、野蛮化してはいない。

かの地のミシガン湖の雪におおわれた岸辺に住む

ヒューロン族も、血と正義の力を認識し、そして褐色の南にあっては、ホッテントット人たちも

万人共通の義務と自然の命令を感じるのだ」⁽⁹⁾

この詩行にうたわれたヒューロン族が、文明に損なわれない自然の状態のなかに生きる人間の理想像ではもはやないことは、だれの目にも明らかであろう。「野蛮化」はいわば啓蒙主義的性善説のうえに立つ表現であって、人間だれしも生まれながらに理性の、とりわけ実践的理性の光を与えられている、と考えるのである。したがって、何らかの原因で野蛮化した人間でも、人間であるかぎり最低ぎりぎりの理性の光を宿している、そしてその例証がヒューロン族であり、ホッテントット族である、というのである。ホッテントット族が十八世紀ヨーロッパにおいては、「人類進化の最低状態をあらわす比較人種学的きまり文句」であつたことは、忘れてはならない。⁽¹⁰⁾

さて以上に見てきたハラーの二つのヒューロン族像が、いずれも当時のヨーロッパ人の因襲的な観方に影響され

た文学的虚構であつたのに対して、一七四〇年代後半以降のハラーはアメリカの、とりわけアメリカ原住民の現実の姿を正確に把握しようと努める。全ヨーロッパに名を知られた自然科学者、医学者でゲッティンゲン大学の教授であるハラーは、「ゲッティンゲン学芸新報」^[1]の編集にも情熱をかたむけたが、この週刊紙に彼は匿名で、また一七五三年彼が故郷スイスのベルンへ帰つたのちも、多くのアメリカ旅行記への論評を掲載した。ほかの刊行物にも彼はアメリカ論評を書いているが、これら論評にあらわれた彼のアメリカ原住民像は、もはや文学的な創作ではなくて、人類学的な考察にもとづいて描かれたものである。そして前面におしだされてくるのは、肉体的にも道德的にも劣等な「インディアン」像である。ただしその際、ハラーは原住民たちの長所も見のがしはしない。それは、たとえば最大限の労働も可能な体力や耐久力、鳥獸狩り、魚とり、皮なめし、陶器づくりなどでの器用さ、さらにはひとの話を一語一句誤ることなく再現できる記憶力などである。これらの能力はたしかに「しつけられて」身につくものではないが、しかしそれらについて報告するとき彼は、なにか興味ある猛獸の特殊能力のごとくに語るといふのである。

ハラーが論評する原住民の状態は身体的にも道德的にも劣悪化ないし墮落していて悲惨である。身体的欠陥については、彼は医学者として考察をくわえ、たとえば、「アメリカ〔現地〕人は虚弱で（……）比較的小さな直腸寄生虫におかされている」というように記しているが、なかんづく注目すべき論評は、彼らは紅茶を飲むために歯が抜けおち、彼らの寿命もまただんだん短くなつていく、ということである。なぜ紅茶を飲むと歯が抜けおちるのか、グートケは説明していないが、紅茶を飲む習慣はもともとイギリス人が伝えたものであり、砂糖を加えて飲むから、その砂糖のために歯が悪くなつて抜けおちるのであるうか。そういう意味では、筆者の私見を加えるならば、紅茶を飲むことは文明の象徴であり、歯が抜けおちるのは文明の害毒のあらわれと言えよう。

原住民の風俗習慣ないし道德については、「インディアン」は人を喰うとか、エスキモー（＝アメリカ大陸最北部

の原住民）は人殺しや盗みを「してもかまわない」ことと思っているとか、要するに、これらの行為は自然の状態においては単に生活の必要に属しているにすぎないということが、それ相応の嫌悪感をもって強調される。最も不快な習慣は拷問である。さらにまた、日本語ならば「殉死」という語で言い表わされる風習、つまりだれかの死に際して兄弟や近親者が自殺し、妻妾その他が自発的に締め殺されるといふ習慣が報告される。そして、もしこれらの風俗習慣を論評するハラーの言辞にライトモティーフがあるとすれば、それは「残忍」という語であるという。「残忍」はしばしば「陰險」と手を携えている。これらの道徳的欠陥にさらに「裏切り」、「嘘つき」、「怠惰」がくわわる。とりわけ「怠惰」は厳格なカルヴィン教徒であるハラーにとってこの上なく厭わしいものである。

ところで、原住民たちはヨーロッパ文明との接触によって善導されたであろうか。答は「否」である。それはむしろ彼らの欠陥を助長した。とりわけ彼らがヨーロッパ人からまんだ火酒を飲む習慣は、彼らの道義と健康をむしろしんだのである。そもそも悪徳と墮落においてヨーロッパ人とアメリカ原住民とに違いがあるだろうか。ラテン系民族の移住者たちが現地人を残虐に扱ったこと、その他の植民者たちにしても「インディアン」をアルコールによって破滅させたことは、明白な事実である。ヨーロッパの「文明人」もアメリカの「野蛮人」もともに齒が抜けおち、同じ疫病にかかって死ぬのである。

以上見てきたような、アメリカ原住民の悲惨な状態は、ハラーの目に明白となった。たとえばインカの遺跡が証明するように、アメリカ原住民がかつては高い文化と文明の水準を所有していたことは、まちがいない。ハラーは、彼らがどうしてそのような高い水準に到達できたのか、そしてまたなぜ現在の悲惨から救出する道については真剣に考えたようである。またのか、という問題には言及しないが、彼らを現在の悲惨から救出する道については真剣に考えたようである。啓蒙主義者であり厳格なカルヴィン教徒であるハラーが考え出したその道は、ただ一つしかない。すなわち、それはキリスト教への改宗による「野蛮人」の教化と文明化である。

十八世紀ドイツのキリスト教諸宗派のなかで、海外伝道活動に最も積極的に従事したのは、ヘルンフト派敬虔主義すなわち同胞教団であらう。ここで同胞教団の海外伝道事業の要点を、主としてエーリッヒ・バイロイターのツインツェンドルフ評伝三部作、とくにその最後の巻『ツインツェンドルフとキリスト教世界』によって、たどってみよう。ツインツェンドルフと言うまでもなくヘルンフト派敬虔主義の創始者、同胞教団の教祖ニコラウス・ルードヴィヒ・フォン・ツインツェンドルフ伯爵（一七〇〇—一七六〇）である。彼が、それまで勤めていたドレスデンの宮廷を辞した一七二七年、ヘルンフトの同胞教団の新しい組織がほぼできあがったが、その翌年の二月十日に開かれた第一回教団集会では、「人々はトルコやモール人国やグリーンランド、ラップランド等々の遠くはなれた国々のことを報告しあい、そういう国々へ行くことは不可能のようだ、と言った。しかし団長（『ツインツェンドルフ』はこう言われた、私は、主がいずれは私たちの同胞（『同胞教団の信者は同胞と呼ばれた』）たちに、これらの国々を訪れられるよう、み恵みと力を与えることがおできになるだろうと信じます、と。」⁽¹³⁾そして教祖ツインツェンドルフの主導のもとに、この日早くも、「異教徒世界での伝道任務につく準備をすることが決定された」⁽¹⁴⁾のである。

この日ある同胞が報告したところによると、当時デンマーク・ノルウェイ教会が、グリーンランドとラップランドの異教徒に対して、いわゆる北方伝道をおこなっていた。デンマークはそのほか中央アメリカにいくつかの植民地をもち、そこには多数の黒人奴隷が働いていたが、しかし伝道活動はおこなわれていなかった。一七三二年八月、同胞教団の最初の異教徒伝道使節二名が、ヘルンフトを発ってコペンハーゲンへ向かった。彼らの最終目的地は

カリブ海上のセント・トマス島だった。この島はデンマーク領になっていたが、彼らをその島まで同伴しようとするデンマーク船長は一人もなく、やむなく彼らは運賃を払ってオランダ船の乗客となって大西洋を渡ったのである。しかし、西インド諸島の白人植民者たちにとって、黒人奴隷は家畜以上のなにもでもなく、奴隷にキリストの福音を伝えるなどということは、彼らの思量の範囲外のことであった。このような植民者や総督府の役人たちの無理解や非協力にもかかわらず、その年の秋には早くも、「最初の野蛮人たちの改宗の報告」⁽¹⁵⁾が到着したという。翌一七三三年には別の伝道団がグリーンランドに向い、さらに年をおって南アメリカ大陸のスリナム、アフリカのゴールド・コースト、ケープランドへと同胞たちが派遣されていき、そして間もなく北アメリカ大陸の「インディアン」たちのあいだで伝道活動が始まったのである。

この伝道活動は教祖ツインツェンドルフの、この地上に神の王国を建設しよう、という宗教理念に源を発し、彼が同胞たちに吹きこんだ、自分たちは神に導かれた、神の戦士である、という自覚に支えられていた。伝道者たちの大部分は職業宣教師ではなくて、もともとは手工業者や農民であったが、彼らがどのような困難にも屈せず、どのような犠牲をいとわなかったのは、まさにそのような自覚、あるいは宗教的熱中の結果であろう。ツインツェンドルフが伝道に出発する同胞たちに与えた掟は、異教徒たちをひたすら愛しなさい、ということであった。そして彼らは、「あらゆる人種の人間たちの友愛を発見し、そして実践した」⁽¹⁶⁾り、また「あらゆる宗教のあらゆる同胞たちと神の子たちを愛することなく愛しつづける」という誓を忠実にまもった、という。こうして異教徒世界にもキリスト教への改宗者が次第にふえてきて、やがてドイツ本国の同胞たちを訪問する者もでてきて、教団の会堂でかつての黒人奴隷やエスキモー、その他の海外教区の代表者たちがドイツ人同胞たちと仲間になるという光景も、珍しくなくなった。しかし、「その際、海外から訪問してきた元異教徒の改宗キリスト教徒のかなり多くは、慣れないヨーロッパの気候風土の犠牲になった。彼らは、自分たちの故郷にはない、したがって予防する薬もない病気に斃れ

た。人々は彼らの遺体を、同胞教団の墓地に眠っているドイツ人の兄弟姉妹のあいだにやすませた¹⁷という。

ツインツェンドルフ自身は、二度にわたってアメリカへ渡航した。最初は、一七三八年十二月二十一日オランダのアムステルダムを出港し、翌年一月二十九日西インド諸島の一つセント・トマス島に上陸した。当時彼の耳に教団の伝道事業に関連して、「ツインツェンドルフは兄弟や姉妹（ともに同胞すなわち教団の信者のこと）を無慈悲に扱い、彼らをただひたすら死においやるばかりだ¹⁸」という陰口が耳にはいり、彼はこのような非難をはね返すべく、現地の状況視察をかねて、高貴な身にとっては無謀な冒険ともいえる危険な旅にあえて出発したのである。セント・トマス島では黒人奴隷たちは白人植民者の暴虐のもと悲惨な状態におかれ、これに同情して植民者に批判的な同胞教団伝道者たちは、植民地政府の弾圧を受けて危機的状況のなかにあったが、伯爵の突然の到着は同胞たちをこういう状況から救出するようになった。というのも、ドイツの大貴族であるこの教団最高指導者のまえでは、植民者たちも同胞たちの伝道活動に無益な妨害をすることを、手控えざるをえなかったからである。わずか一か月の滞在期間中、教祖みずから島内各地に分散する植民農場を巡回して、クオーレ語（ヨローロッパ言語と有色人種の言語の混成語）で黒人奴隷と談話したという。

二度目は一七四一年十一月から四三年一月までの北アメリカ大陸滞在である。当時この大陸のイギリス領には約百万の白人移民が居住し、その多くは英語を話す人々であった。ツインツェンドルフの目標はペンシルヴァニアだった。その首邑フィラデルフィアでクウェーカー教徒たちに「神の小羊」（キリスト）の福音を説こうとした彼の当初の目的は達成されなかったが、それは高名な説教者ジョージ・ホワイトフィールドに先をこされたからというよりも、より根本的には彼が英語を十分修得していなかったことに原因があったと思われる。彼は約二万人のドイツ人植民者のなかへ入っていった。そこにはルター派、改革教会派（ツヴィングリ、カルヴィンの流れをくむ教会）から、ハレ派を始めとするさまざまな敬虔主義者たち、教会離脱主義者、異端とされた各派、無神論者にいたるま

でのあらゆる宗派が混在していた。もちろんヘルンフト派の同胞たちもいた。宗派間の、とりわけルター派と改革教会派の対立抗争はすさまじかったが、ツインツェンドルフはみずから調停役をかってでて、一応の秩序をつくるとともに、かなりの数の心服者を獲得したようである。ベツレヘム（『英語でベスリエム』とナツアレト（『英語でナザリス』）は、ツインツェンドルフの到着以前に同胞たちがペンシルヴァニアの原始林のなかに開いた植民村であつたが、周囲の辺地には原住民たちの集落が残っていた。一七四二年の夏から秋にかけて、伯爵は三回までも危険かつ難儀な旅をして、そういう奥地の村を訪ねた。第一回は探察旅行で、彼が遭遇した原住民は最初は接觸を冷たく拒否したが、そのあと少しはうちとけた態度を示した。そこで彼は仲立人としてドイツのヴェルテンベルク地方からの移民コンラート・ヴァイサーの協力を求めた。ヴァイサーは、原住民に救助されて恩誼を感じる父親によつて酋長の家に預けられて少年時代をすごしたという経歴の持ち主で、原住民から大きな信頼を寄せられていた。ツインツェンドルフが意図したのは、*civitas Indina = Germana*（「インディアン」とドイツ人の連合教会）を設立することだつたというが、その具体的計画は不明である。最後の旅では、彼はヴァイサーを同伴してサスケハナ河畔の、「とりわけ野蛮なインディアン」といわれているショニー族のもとへ赴いた。ヴァイサーは所用で別の部落へ赴き、ツインツェンドルフひとりがショニー族の村にとどまつた。二十日が過ぎてヴァイサーは胸騒ぎを感じてショニー族の村へ戻ってみると、住民たちはツインツェンドルフを殺害する計画をたてていた。危うく難をのがれた伯爵は、無事ベツレヘムへ戻り、そして翌一七四三年一月ドイツへの帰路についた。

ツインツェンドルフが一年一箇月余の北アメリカ滞在によつてどの程度の伝道成果をあげたのか、バイロイターは記していない。彼のあとを承けてペンシルヴァニアにおけるヘルンフト派同胞教団の組織を整備し、同胞たちの町村を拡充し、また原住民への伝道に尽力するのが、伯爵の最も忠実な協力者であり、伯爵の歿後は教団の事実上の指導者となるアウグスト・ゴットフリープ・シュパンゲンベルグ（一七〇四—九二）である。彼はのちにツイン

ツェンドルフの大部な伝記を書いたが、自分自身についても詳細な履歴書、つまり自叙伝を書いた。この中で彼は伝道活動について報告しているが、それは旅行記として読んでも興味深いものである。彼は海上や陸路でいくたびとなく障害や危険に遭遇するが、その度ごとに、彼がひたすら祈って神の恩寵を求めると、おのずから活路が開かれ、危険が解消される。こうして彼の神への信頼はますます深くなるばかりである。問題は彼の原住民に対する態度である。一七五五年のいわゆる「野蛮人戦争」は、彼のその態度を鮮明に示す機会となった。彼は同胞たちの開拓村に丸太小屋を建て大砲を据えつけて砦とし、避難してきた同胞や改宗した原住民たちを保護する一方、同胞たちに昼も夜も警戒を怠らず、敵の「インディアン」が近づいてきたならば、大砲を発射して周囲近辺にそれを知らせる合図にするよう指示し、さらに、「敵のインディアン一人々々の命をそこなわないように、もし敵のだれかがひよつとして足でも撃たれるようなことがあったならば、手当をして、傷がなおるまで誠実に看護してやりましよう」⁽²⁰⁾とつたえる。このような博愛主義的な人道主義は感動的である。しかし彼は最初、「野蛮人」たちが同胞を、また同胞の信ずる救世主を侮蔑しているという噂をきいたとき、あからさまな敵意を感じざるをえなかった。シュパングェンベルクはこう書いている。「私は、近辺のだれかが、『同胞たちは自分たちの救世主のことをたいへん自慢してきた。さあ、その救世主が同胞たちを救うことができるかどうか、見てやろうではないか』と言ったということを聞いた。さらにまた私が聞いたところでは、一人のインディアンが斧を右左に振りまわしながら、『やつらの救世主はやつらをわしのこの斧から守ってやれるかどうか、見てやろう』と叫んだということです。私は立腹してこう言いました、『救世主さま、あなたは私どもを死なせることはできません。そんなことをなさったら、あなたのお名前にかかります。お願いです、私どもをお救いください』⁽²¹⁾。この怒りの叫びのなかに、彼の原住民に対する基本的姿勢を見ることができよう。

シュパングェンベルクにとって原住民は二種類存在する。それはキリスト教徒に改宗した原住民と、改宗しない、

またキリスト教徒に従属しない「インディアン」すなわち野蛮人である。野蛮人たちを改宗させることが、シュペンゲンベルクのみならず全ての同胞たちの使命なのであるが、それは「同胞であることと、異教徒伝道の仕事を推進することは、同一の事柄である」²²からである。同胞教団の伝道事業が、教祖ツィンツェンドルフ伯爵の宗教理念に源を発していることは、すでに述べた。ヴュルテンベルク派敬虔主義の代表的神学者であるフリードリヒ・クリストフ・エーティンガー（一七〇二—一七八二）は、ツィンツェンドルフに招かれて一七三三年にヘルンフートに滞在したが、彼の自叙伝のなかに次の言葉が見出される。「ツィンツェンドルフ伯爵は全世界の半分をキリストに従属させる計画をたて、この計画の追求にあまりにも懸命だったので、彼のへ凡庸な聖書認識は彼をこのような妄想から救いだすことができなかった」²³。そのツィンツェンドルフはフィラデルフィアでの最後の礼拝でキリストに向かつてこう告白した。「あなたは今本当にペンシルヴァニアに、この国のうちに主人でいらして、インディアンたちとヨーロッパ人たちの間にお住いです」²⁴」

(四)

すでに述べたように、ゲートがクレッテンベルク嬢のために朗読した伝道報告書そのものを私たちは見ることができないが、それに類するもので、彼が実際に読んで面白かったものが、一つのこざれている。その存在を筆者はエーゴン・メンツの論文『商魂の人間性。十八世紀後期のドイツ文学にあらわれたアメリカ』²⁵によって初めて知ったのであるが、それはヘルンフート派同胞教団の伝道者グレゴールが一七七一年六月に同年十月十三日に十一回目の誕生日を迎える娘のために書いてペンシルヴァニアのベツレヘムからドイツのヘルンフートに送った詩形式の手紙である。

グレゴールは自分たちの伝道活動を、「アメリカにおける救世主キリストの仕事」⁽²⁶⁾として語る。まずベツレヘムは、「国のうちに光りがやく救世主の小さな町として」⁽²⁷⁾ヘルンフートにたとえられ、同じように主の祝福を受けた小さな町小さな村としてナツアレト、クリスチアンスブルン、グナーデントール、リティツの名があげられる。その他にも同胞教団の影響が及んでいるいくつかの集落があつて、その一つがフリーデンスヒュッテンである。それは、「サスケハナの大河のほとり、／ひとびとはインディアン・マナを碎いて食べものとしなければならぬ」⁽²⁷⁾地域に位置し、そこに到る道はほとんどないも同然で、嶮岨きわまりない。グレゴールはその年の五月、二人の同胞とともに、道切り開き役の四人の「インディアン」を伴つて、百七十マイル先のその村落へ伝道のために「行進」した体験をこの手紙詩に縷々書きしめるのである。さまざまな難儀にうちかち、幾夜かの野宿をかさねたのちに到着した村では、「改宗した異教徒たち」⁽²⁸⁾の歓迎を受けて、五日六日と滞在をかさねる。「それはすてきな人々で、人品はりつばで、／正直で、物分りのいい、褐色の民族です。」⁽²⁹⁾伝道者たちは聖霊降臨祭の日に、五人の成人した「異教徒」と一人の赤子に洗礼をほどこし、アントーンとかヤーコプ、ティモテウス、パウリーネ、マルタ、ヨハンナという名前を授け、そしてこの村で体験したことすべてに心底から感謝しつつ帰路につくのである。

ゲーテがこの詩をいつ初めて読んだかは、不明であるが、かなり早い時期だったと思われる。一八二九年九月二十三日付けのカール・アウグスト・ファルンハーゲン・フォン・エンゼ宛ての手紙でゲーテは、この手紙詩を「あなたがその歴史にたいへん注意を払っておられたあの注目すべき男の見解から生まれたもののなかで恐らくは最も優雅なものと思なされうるヘルンフート派の詩」⁽³⁰⁾と呼んでいるが、「あの注目すべき男」がツインツェンドルフをさすことは言うまでもない。また同年十一月エッカーマンがファルンハーゲン・フォン・エンゼに書いた手紙によれば、この手紙詩の「素朴な音調と陽気で率直な語り口」⁽³¹⁾がゲーテを大いに楽しませたということを、ゲーテ自身がエッカーマンに語ったという。

一八〇八年六月カールスバートに滞在中のゲーテは、同じくその保養地に滞在するツィーゲザル家の娘ジルヴィーの誕生日（六月二十一日）に祝賀の詩を贈った。これは右のグレゴールの手紙詩の「音調と性格」⁽³²⁾を模倣するものであったが、しかし精神はまったく別物であった。というのは、ヘルンフート派同胞教団への、またその伝道活動への否定、否認ないし批判が、すでに最初の一連にはつきり表明されているからである。

「俗世のマナとして精神のマナが食べられる、

荒野を流れるサスケハナの河岸ではなくて、

グナーデントールからではなくて、愛餐で救世主の血の代りに

紅茶が飲まれるヘルンフートに向かつてではなくて、

しかり、テペルの河岸を、モール人の一団が

聖ネポムク像を眺めている大きな橋から

獵犬に道をさえぎられることなく

絶えず走りつづける白い鹿のもとへ、この紙片よ、急いでくれ、元氣よく速足で、

短いベッドに世にも丈長い乙女が休んでいるところへ向かつて」⁽³³⁾

グナーデントールがペンシルヴァニアの同胞教団植民村であることはすでに見たとおりである。「白い鹿のもとへ」
Zu dem weissen Hirschen は、カールスバートの町の周りの丘の一つであるヒルシュユプリング Hirschsprung
をさし、そこにある旅館の一つにツィーゲザル家は滞在していたのだろうか、しかしこれは筆者の想像にすぎない。
いずれにせよ、ゲーテの同胞教団への否定の気持は三つの「ではなくて」nicht と「しかり」（原文では否定詞 Nein）

に表われている。もしゲーテが同意の気持をもっていたならば、「のように」*so*と書いたはずである。また、「愛餐に救世主の血の代りに紅茶が飲まれる」という表現は、ヘルンフト派に対する皮肉と批判である。筆者が見たかぎりでは、同胞教団の愛餐で紅茶が飲まれたという記録はなく、通常どう酒が用いられたという。にもかかわらず、ゲーテがわざわざ紅茶をもちだしたのは何故だろうか。「ゲッティンゲン学芸新報」でハラーのアメリカ論評を読んで、アメリカ原住民の紅茶を飲むという新しい習慣に印象づけられていたのだろうか。この推測を裏づける積極的な証拠を筆者はもちあわせていないが、いずれにせよ、ハラーの論評にしたがえば、すでに見たように、紅茶を飲むことは齒が抜けおちる原因であり、それはヨーロッパ文明がアメリカ原住民にもたらした弊害の象徴である。ゲーテのジルヴィー誕生日祝賀の詩は、同胞教団による伝道が原住民たちに幸福ではなくて実は弊害をもたらしていることを、ゆくりなくも暴露するものである。

さて、ここで再び最初の設問にもどって、一七七四年の、つまり第三次フランクフルト時代のゲーテが、アメリカ原住民の状態をどう見ていただろうか、考えなければならない。考える材料として筆者の手もとにある資料は、すでに見たシュパンゲンベルクの履歴書とグレゴールの手紙詩だけである。この二つを並べてみると、同じ鋳型から作ったような共通の特徴に気がつく。それはすでに見たように、あらゆる困難にうちかつて、キリストの福音を伝えようとする伝道者の使命感である。この使命感それ自身は非難すべきことではない。しかしその一方で、右の二つの資料をさらに注意深く観察してみると、共通して欠落したものが分ることが分る。それは、彼らの伝道活動の対象である原住民の立場への配慮、もつと分りやすく言えば、相手の身にもなってみるという気持である。具体的に見ると、最も重要な問題は、「キリストに従属」すること、つまり改宗が、原住民たちにとって本当にいいことなのかどうかであるが、シュパンゲンベルクの履歴書には不思議なことに、その点についての考慮が見られない。グレゴールの手紙詩も同様である。ひょっとすると原住民たちは、優越的な文明をもった白人植民者によって原始

林の奥や荒野の果てへ追いつめられることを避けるために、やむをえず改宗するのではないか。このような憶測はキリスト教の神を唯一絶対者としていたたく伝道者たちには、決して許されぬことであろう。メンツも前掲の論文で指摘しているように、洗礼を受けた原住民はアントーンとかパオーネというヨーロッパ人とおなじ名前で呼ばれるが、それまでは彼らは何という名前であったか、グレゴールは報告していない。つまり彼らの原住民としての立場は無視されている。また彼らがどのような動機から改宗を決意したかという問題にも、グレゴールは立ち回らない。ましてや改宗に際しての彼らの感情など知るよしもない。いずれにせよ、彼らは先祖伝来の神をすててキリスト教徒になって、初めて人間なみの扱いをうける一方で、自分たちの過去をまったく無視されるのである。これが人間として幸福なことかどうか、大いに論議のあるところであろう。

思うに、若いゲーテはいくつかの伝道報告書を読みながら、そこに欠落しているものに気がついたにちがいない。彼は伝道者に反発し、原住民の味方をした。その数年前、つまり第二次フランクフルト時代のゲーテは、あやうく同胞教団に改宗させられようとしながら、最後まで自己の信條——それはまだ未定形のものだったが——をすてることができず、一歩手前で踏みとどまった。そういう体験をもつゲーテが、アメリカ原住民の運命に心からなる同情をもったことは、むしろ当然であろう。第三次フランクフルト時代のゲーテは、ひとから「ヒューロン族」とか「西インド人」と呼ばれたということであるが、それというのも彼がアメリカ原住民の身になってものを考え、ものを言い、ふるまったからにちがいない。このような彼のたいなる人間性がどこから由来するのかという問題は、さらに深い考察を必要としよう。

付記 昭和六十二年十月十五日京都市で開催された日本独文学会秋季研究発表会で口頭発表された『ゲーテとアメリカ原住民』は本稿によるものである。

- (1) Goethes Werke Bd. 10, Hamburg 1959, S. 42.
- (2) Vgl. Johann Wolfgang Goethe: Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Hrsg. von Ernst Beutler, Zürich 1950, Bd. 23, S. 120.
- (3) Karl S. Guthke: Edle Wilde mit Zahnausfall. Albrecht von Hallers Indianerbild. In: Amerika in der deutschen Literatur. Neue Welt - Nordamerika - USA, hrsg. von S. Bausinger, H. Denker und W. Malsch. Stuttgart 1975.
- (4) Albrecht von Haller: Die Falschheit menschlicher Tugenden, 1730.
- (5) Vgl. Guthke: a. a. O., S. 29.
- (6) Haller: Die Alpen, 1929.
- (7) Albrecht von Haller: Die Alpen und andere Gedichte. Auswahl und Nachwort von Adalbert Elschenbroich. Stuttgart 1965, S. 44.
- (8) a. a. O., S. 45.
- (9) a. a. O., S. 45.
- (10) a. a. O., S. 46.
- (11) Haller: Über den Ursprung des Übels (1734). In: a. a. O., S. 67.
- (12) Guthke: a. a. O., S. 33.
- (13) Göttingische Gelehrte Anzeigen. 一七三九年創刊。一七四一—一七五三年編集同入。
- (14) Guthke: a. a. O., S. 38.
- (15) Erich Beyreuther: Zinzendorf und die sich allhier beisammen finden. Marburg an der Lahn 1959, S. 249.
- (16) Derselbe: Zinzendorf und die Christenheit. Marburg an der Lahn. 1961, S. 10.
- (17) a. a. O., S. 13.

- (16) a. a. O., S. 16.
- (17) a. a. O., S. 18.
- (18) a. a. O., S. 170.
- (19) a. a. O., S. 222.
- (20) August Gottlieb Spangenberg : Lebenslauf unsers seligen Bruders August Gottlieb Spangenburgs, geannant Joseph, von ihm selbst aufgesetzt. In : Archiv für die neueste Kirchengeschichte, hrsg. von D. Heinrich Philipp Conrad Henke. 2. Bd., Weimar 1796. S. 468.
- (21) a. a. O., S. 467.
- (22) E. Beyreuther : Zinzendorf und die Christenheit, S. 11.
- (23) Friedrich Christoph Oetinger : Selbstbiographie. Genealogie der reellen Gedanken eines Gottesgelehrten, hrsg. von J. Roessle, Metzingen 1961, S. 66.
- (24) E. Beyreuther : Zinzendorf und die Christenheit, S. 223.
- (25) Egon Menz : Die Humanität des Handelsgeistes. Amerika in der deutschen Literatur des ausgehenden 18. Jahrhunderts. In : Amerika in der deut. Literatur. 1975.
- (26) Meiner Tochter Christiane Gregorin zu ihrem elfften Geburtstage den 13. October 1771, aus Bethlehem nach Herrnhut. In : Goethes Werke. Hrsg. im Auftrage der Grossherzogin Sophie von Sachsen. I. Abtheilung Bd. 5, 2. Abt., Weimar 1910. S. 140.
- (27) a. a. O., S. 141.
- (28) a. a. O., S. 142.
- (29) a. a. O., S. 143.
- (30) Goethes Werke, IV. Abt. 46. Bd. Weimar 1908, S. 83.
- (31) J. W. Goethe : Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Bd. 23, Zürich 1950. S. 651.
- (32) Goethes Werke, I. Abt. 5. Bd. 2. Abt. Weimar 1910. S. 140.
- (33) Goethes Werke, I. Abt. Bd. 4, Weimar 1891. S. 236.

(28) Vgl. Harold Jantz : Amerika im deutschen Dichten und Denken. In : Deutsche Philologie im Aufriß. 2. überarbeitete Aufl., hrsg. von W. Stammier, 3. Bd. Berlin 1962.